



学校だより

上尾の児



第3号

令和3年9月29日

埼玉県立上尾特別支援学校

<https://ageo-sh.spec.ed.jp/>



「勇気と感動をありがとう」

校長 竹野谷 一幸

57年ぶりに日本でパラリンピックが開催されました。新型コロナウイルスの感染が拡大する中、開催の是非については様々な意見があることと思いますが、私はパラリンピアンの方からテレビの画面を通して、たくさんの勇気と感動をもらいました。

そのうちの一人が本校卒業生の古屋杏樹選手です。古屋選手は9月3日(金)陸上女子1500m(知的障害T20)に出場して4位に入賞しました。ここで、古屋選手について紹介したいと思います。

軽度の知的障害があり、中学校まで普通学級に通ったが、複雑な動きを理解することが苦手だった。母の亜樹さんは「手足の動きがバラバラで、自転車にも乗れない。かけっこも、いつも断トツでビリでした」。いじめにも遭い、家にこもった。それが、上尾特別支援学校に進学後、徐々に変わった。

1年生のときの体育祭。亜樹さんは娘の姿に「普通に走れてる!」と驚いた。

2年生のときに県内の大会で800mを走り、3位で表彰台に上がったことが転機になった。古屋選手は「賞状をもらってうれしかった。もっと走りたい。」と思った。

卒業を機に、知的障害がある選手が所属する「彩tama陸上クラブ」に入り、トラック競技を本格的に始めた。平日はクラブの選手が共同で生活する「グループホーム」で過ごし、週1回の休み以外は男子選手らと練習の日々。基礎を何も知らなかった古屋選手は「全部が大変だった」と振り返るが、クラブ代表のコーチは「淡々とこなす。とにかく忍耐強い」と評する。

昨春以降、新型コロナの影響で出場予定の大会が次々中止に。東京パラリンピックの延期が決まると、障害の特性で急な予定変更不安を感じる古屋選手はひどく落ち込んだ。集中できない日々は数か月に及んだ。一緒に生活し練習する選手たちやコーチ、母との日常が支えだった。

古屋選手は「支えてくれたみんなに『よかったね』と言ってもらえる走りを見せたい」と意気込む。
(令和3年9月3日(金)朝日新聞より抜粋)

9月3日10時26分、オリンピックスタジアムのスタートラインに立った古屋選手。スタートの号砲とともに勢いよく飛び出しました。3分20秒過ぎ、残り1周まで先頭でレースを引っ張り、最後の1周も強豪たちと競り合って4位でゴール。レース後のインタビューでは「悔しいですけど、出し切ったと思います。タイムもベストを出せなかったのが悔しいです。」と述べました。

パラリンピックのシンボルマークは「スリーアギトス」と呼ばれています。「アギト」とはラテン語で「私は動く」という意味で、困難なことがあってもあきらめずに限界に挑戦し続けるパラリンピアンを表現しています。「誰もが”翼”をもっている」ことを表現した開会式、そして「強い意志」を持って競技に挑んだ古屋選手をはじめとするパラリンピアン達から、たくさんの勇気と感動をもらいました。

令和4年度4月に転居等の理由で転校を予定されている方、小、中学校への転学(学習形態の変更)を希望されている方は個別面談の時に担任までお知らせください。